

令和 6 年 5 月 22 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13061

研究課題名（和文）狩野文庫本『毛詩草木鳥獸虫魚疏』における書入れの翻刻と研究

研究課題名（英文）Study and Transcript of Annotation on Maoshi-Caomuniaoshouchongyu-Shu in the collection of Kano Kokichi

研究代表者

矢島 明希子 (Yajima, Akiko)

慶應義塾大学・斯道文庫（三田）・講師

研究者番号：20803373

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は東北大学附属図書館狩野文庫所蔵の陸キ『毛詩草木鳥獸虫魚疏』（狩2-1794-2、以下『陸疏』）の書き入れを調査し、その他狩野文庫の漢籍調査によって書き入れの性格を検討することを目的としていたが、新型コロナウイルス感染拡大によって原本調査に制約を受けた。そのため、『陸疏』の日本における受容を検討し、書き入れに引用された『詩経小識』の伝本調査を行った。これらは『斯道文庫論集』に成果を発表している。研究期間を一年延長した最終年は、ほとんどの機関で制約が解除され、狩野文庫での原本調査を再開することができ、上述の成果を加味して書き入れの検討を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、日本における名物書の受容とその利用について明らかにした点である。本研究が対象とした陸キ『毛詩草木鳥獸虫魚疏』（以下『陸疏』）は中国でも『詩経』の名物書として早期に著され、日本へも伝来した。しかし、早くに散佚し日本でもその原型がいつまで伝わっていたのか明らかでない。明代以降、数種の佚集本が作成され日本へ流入し、『詩経小識』等に佚集本が引用されている。これらの書物は日本の名物学を考える上で基本的な書物であるが、これまで『陸疏』の受容に関する詳細な検討や『詩経小識』の伝本の悉皆調査はほとんど行われておらず、本研究は今後日中の名物学を考える際の基礎になると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine the handwritten annotation of "Maoshi Caomuniaoshouchongyu Shu 毛詩草木鳥獸虫魚疏" written by Lu Ji 陸キ, hereafter abbreviated as "Lu Shu", in the Kano Collection, Tohoku University Library, and to study the character of that annotation by investigating other Chinese books in the Kano Collection. However, due to the spread of the Covid-19, this study was restricted in my investigation of the original books. Therefore, I examined the reception of "Lu Shu" in Japan, and conducted a survey of manuscripts of "詩経小識 Shikyo Shoshiki" quoted in the annotation of "Lu Shu". These results were published in the "Bulletin of Shidobunko". In the final year of the project, when the restrictions were lifted, I was able to resume my investigation of the original books in the Kano bunko and examined the annotation.

研究分野：書誌学

キーワード：毛詩草木鳥獸虫魚疏 書誌学 名物学 本草学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵の陸キ『毛詩艸木鳥獸虫魚疏』(狩2 - 1794 - 2、以下「狩野文庫本陸疏」あるいは該本)を研究対象とする。該本にはおびただしい補注が書き入れられている。こうした書き入れは、本書が日本でどのように読まれていたのかを示すものであり、日本の伝統的知識形成を知る上で意義が大きい。

また、狩野亨吉(1865 - 1942)の狩野文庫は膨大な蔵書で知られ、本草学や名物関係の重要資料も多く蔵されている。こうした書物群がどのような意図を持って蒐集され、その中でも該本がどのような位置づけであるのかを検討することで、日本が中国古典を中心とした学問から西洋の学問へシフトチェンジしていく過渡期に、本書のような伝統的学問がどのように理解されていたのかを知ることに繋がると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、狩野文庫本の書き入れを調査するとともに、狩野文庫のその他の関連資料を調査することによって、該本の位置づけを検討し、陸キ『毛詩艸木鳥獸虫魚疏』(以下、『陸疏』あるいは本書)の日本での受容や学問のあり方について研究することである。

3. 研究の方法

原本調査を研究の根幹とする。まず、対象となる該本の書誌調査および写真撮影を行い、翻刻のための資料とする。

次に、特に東北大学附属図書館狩野文庫内のその他の関係資料を網羅的に調査する。狩野亨吉は、『本草綱目』など本草関係の漢籍や、『詩経』の注釈書を多数蒐集している。該本とともにこれらを調査することによって、書き入れがどのような典籍を参照していたのかを明らかにする。

また、狩野の蔵書目録などから、狩野の蒐集の傾向を検討し、該本がどのような位置づけにあったのかを検討する。

4. 研究成果

本研究の目的は狩野文庫本陸疏に書き入れられた補注の翻刻および、狩野文庫内での該本の位置づけについてであるが、2020年初頭から全世界に広がった新型コロナウイルスの影響を被り、当初の計画通りに進めることができなかった。

それでも、本研究には少なからぬ成果があったため、以下の4点に分けて報告を行う。

(1) 書き入れの翻刻について

2019年に該本の全丁撮影を行い、その画像に基づいて翻字を進めた。2023年までに全体の翻字が完了した。さらに、漢文体の部分については訓読化を進めている。

(2) 書き入れの筆跡について

該本の書き入れに引用された書名を手がかりに、狩野文庫本で関連が深いと考えられる書目から筆跡を中心とした調査を行った。2019年より東北大学附属図書館狩野文庫の詩経関係資料を調査したところ、『監本詩経』(狩2-25414-4)の帙内面に「諸家論」と題され、末尾に「狩野氏蔵本」と記された藍筆の書き入れを見出した。しかし、この書き入れは、『陸疏』の書き入れとは筆跡が異なる。その他、『詩経古註』(狩2-1774-5)や『詩経集注』(狩2-1777-4)にも多くの書き入れが見られたが、いずれも筆跡が異なっていた。さらに、辞書類や子部の書籍へも調査を広げると、ここでも複数の筆跡が見られた。そのうち、『陸疏』が引用する『陳眉公訂正夢溪補筆談』(狩1-880-1)のわずかな書き入れが、『陸疏』の筆跡と近似しているように思われた。

しかし、これら漢籍調査だけでは、筆跡の同定は困難と考え、特に新型コロナウイルスの感染拡大によって原本の閲覧が制限されてからは、狩野文庫の国書を収めた『東北大学附属図書館所蔵狩野文庫マイクロ版集成』(丸善、以下『狩野文庫マイクロ版集成』)のうち、経学・語学・薬学・博物学・植物学など、『陸疏』と関連する内容の書目を中心に、写本や書き入れの筆跡を比較した結果、該本の書き入れの筆跡は狩野氏の筆とは異なるという結論に至った。これは当初の想定から離れるが、該本の書き入れが日本における本書の受容及び、名物学・博物学史上意義のあるものと考え、本課題を続行した。

(3) 原本調査の進展について

東北大学附属図書館が所蔵する膨大な狩野氏旧蔵書のうち、国書の多くは『狩野文庫マイクロ版集成』で閲覧が可能だが、漢籍については多くが画像化されていないため当地にて原本調査する必要があり、2019年度は詩経類及び辞書類など18点を閲覧・調査した。しかし、2020年度以降は新型コロナウイルス感染拡大により各調査先で入館制限が設けられたため、調査を延期せざるを得なかった。

そのため、2020年度は、日本における『陸疏』の受容について国書の引用から整理・検討を行った。具体的には、源順『倭名類聚抄』・惟宗具俊『本草色葉抄』・清原宣賢『毛詩抄』・林羅山『多識編』・稻生若水『詩経小識』・貝原益軒『大和本草』・江村如圭『毛詩名物辨解』である。これらの中に引用される『陸疏』を検討することで、その受容について検討した。このうち、『多識編』・『詩経小識』・『大和本草』は、狩野文庫本書き入れにも書名を挙げて引用されており、書き入れの主が参照していたことは明らかである。そして、典拠を示さない書き入れも、『毛詩名物辨解』の内容と近似した記述が見られた。この検討によって、本研究が扱う『陸疏』の日本における伝来や受容の状況を確認することができたが、さらに、これらの引用を確認する過程で、『詩経小識』や『詩経名物辨解』の内容が狩野文庫本の書き入れと深く関わっているのではないかという発想を得るに至った。

2021年度も制限が継続されたため、狩野文庫本『陸疏』の書き入れも引用する『詩経小識』の伝本を整理し、書き入れの引書が何に基づくのかを検討する基礎的な研究を行った。

『詩経小識』(以下『小識』)は、『詩経』に見える動植物についての名物書である。江戸時代中期の本草学者・稻生若水(1655-1715)によって編纂され、草属二巻、木属・鳥属・獸属・魚属・虫属・退類略各一巻の計八巻から成る。本書は、新井白石が後に將軍家宣となる徳川綱豊に『詩経』を講義するに当たり、若水に委嘱して作成させたもので、完成は宝永六年(1709)であった。極めて限られた学問の場での参考書であったためか、刊行されることなく写本でしか伝存していない。それでも、『詩経名物弁解』など刊本で広く流布した名物書に引用されるなど、その影響は小さくなく、諸伝本のうち、2021年度に原本調査が行えたのは19点である。加えて、マイクロフィルムなど画像で確認できたものが3点である。これらの伝本には内容が大きく乱れているものもあったが、その他の伝本も異同を確認していくと一定の共通性が見られるグループを見いだすことができた。こうした共通性は、『詩経小識』の内容もさることながら、本書の伝写に関わった人々の関係を描き出すことにもつながる。

2022年は諸機関で徐々に制限が解除されはじめ、『小識』の伝本調査を完了することができた。22年度は、15点の原本調査を行い、現在所在が判明して調査可能な範囲では全ての伝本を調査することができた。その結果、21年度に調査した伝本と関係が近いと考えられる伝本が数点発見され、前年度までに調査した伝本と合わせて整理・検討を行った。

また、22年度の後半は多くの機関で外部の閲覧が可能になったため、東北大学附属図書館の『陸疏』および、狩野文庫の関係する写本数点について原本の閲覧し、筆跡の比較など調査を開することができた。しかし、これまでの進捗の遅れは大きく、本研究の期間を1年延長し、2023年度も3度にわたって東北大学附属図書館において『詩経』や農書・名物書関係の漢籍31点の調査を行った。

(4) 本研究の成果発表について

本研究によって以下の論文を発表した。

「日本における『毛詩草木鳥獸虫魚疏』の受容 国書中の引用に関する調査」『斯道文庫論集』第55輯, 2021年, 209-241頁

日本における『陸疏』の受容について、国書の引用から整理・検討を行った。『陸疏』は9世紀後半の『日本国見在書目録』に書名が挙がるが、その後しばらく目録類にその名は見られない。本書は『詩経』の注釈書であり、かつ名物学・本草学の分野に多く引用されることから、この分野の国書の中でどのように引用されているのかを検討した。その結果、13世紀後半の『本草色葉抄』における引用は、典拠とする『証類本草』に引かれた『陸疏』の孫引きであり、16世紀に書写された『毛詩抄』の引用は同じく典拠とする『毛詩正義』の引用を孫引きしたものと考えられる。しかし、明末に佚集本が刊行され日本に流入すると、国書の引用の中にも明らかに佚集本からの引用が増えてくる。特に稻生若水の『詩経小識』や江村如圭の『詩経名物辨解』といった『詩経』の名物書ではその傾向が強くあらわれており、底本には毛晋の『毛詩草木鳥獸虫魚疏広要』が用いられていることが分かった。

「稻生若水撰『詩経小識』の伝本調査(一)」, 『斯道文庫論集』第56輯, 2022年, 485-529頁

『小識』は、宝永六年に本草学者の稻生若水が著した『詩経』の名物書である。自跋によると、新井白石に依頼されて作成したもので、『折たく柴の記』など白石側の資料によると、徳川綱豊(のちの家宣)に『詩経』を講じる際の参考書として、図譜とともに作成されたものと考えられ

る。本書は『毛詩品物図攷』などその後の詩經名物書に引用されているが、刊行はされず写本のみで伝わっている。伝本は比較的多いが、これまで伝本整理はほとんどされてこなかった。そのため、国内に伝在する本書の悉皆調査を行い、整理・検討したものである。

まず、本稿では原本調査できた伝本が19点、マイクロフィルム等画像のみ閲覧できた伝本3点の書誌を掲載し、若水自筆とされる京都大学附属図書館所蔵の若水遺稿本を基準として項目(品名)と引用書名の異同を比較し、各伝本の特徴を整理した。

「稲生若水撰『詩經小識』の伝本調査(二)」、『斯道文庫論集』第57輯, 2023年, 363-404頁

引き続き、『小識』の諸伝本を調査し、整理・検討したものである。本稿では14点の伝本と、藤沼尚景増補『詩經小識補』(安永10年写)1点を加えた。

これらの伝本は書写年代や書写者が明確でないものも多いが、前稿で調査した諸本と合わせて整理した結果、6つのまとまりが確認できた。中でも特徴的なものは、岩瀬文庫の山本封山写本に近い一群で、京大谷村文庫の2点は山本読書室との関係がうかがえる。その他、佐賀県図書館鍋島文庫の鍋島藩医・津田松園の天明4年校訂識語本と、林家の学頭を務めた関松窓の天明8年校訂識語本は、ともに若水自跋の年記「寶永」を「寛永」に誤るなど、近い関係にあったことがうかがえる。

本書の意義は、詩經名物学の先駆けというにとどまらず、『詩經』を読む際の基礎知識として転写されたことにより、本書が經学と本草学の両方にまたがる知的ネットワークの足跡になっていることが明らかになった。

の成果は2023年11月18日に、早稲田大学の柳井イニシアチブ国際シンポジウム「越境する書物交流と博物書写 蔵書・經学・デジタル歴史学」において、『詩經小識』の諸伝本について「写本に見る知的ネットワーク」と題して報告を行った。

以上、本研究は新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、当初の計画通りに進めることが困難な状況に陥ったが、『陸疏』は日本の名物学の受容と展開を考えるうえで基礎的な文献資料であり、その書誌学的研究として一定の成果があったと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 矢島明希子	4. 巻 57
2. 論文標題 稲生若水撰『詩經小識』の伝本調査（二）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 斯道文庫論集	6. 最初と最後の頁 363-404
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 矢島明希子	4. 巻 56
2. 論文標題 稲生若水撰『詩經小識』の伝本調査（一）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 斯道文庫論集	6. 最初と最後の頁 485-519
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 矢島明希子	4. 巻 55
2. 論文標題 日本における『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』の受容：国書中の引用に関する調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 斯道文庫論集	6. 最初と最後の頁 209-241
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 矢島明希子
2. 発表標題 夜鳴鳥の各種様態：従文献的角度考察文化伝承
3. 学会等名 線上会議「末日的語文学」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 矢島明希子
2. 発表標題 『詩経小識』の諸伝本について 写本に見る知的ネットワーク
3. 学会等名 柳井イニシアチブ国際シンポジウム「越境する書物交流と博物書写 蔵書・経学・デジタル歴史学」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------